

東北地方における希少淡水魚類

杉山秀樹（秋田県水産振興センター）

キーワード：希少淡水魚類・レッドデータブック・減少原因・保全

「野生生物を人為的に絶滅させないためには、絶滅のおそれのある種を的確に把握し、一般への理解を広める必要があることから」（環境省，2003），1991年に環境省において「日本の絶滅のおそれのある野生生物―脊椎動物編」をとりまとめ，その改訂版を2003年に「汽水・淡水魚類編」（以下，環境省版RDBと記載）として出版した．このような流れを受け，東北地方の各県においても県版のレッドデータブック（以下，県版RDBと記載）を公表するようになった．今回，これらの資料に基づき，東北地方における希少淡水魚の現状，減少原因及び保全について検討した．

【方法】

使用した資料は，環境省版RDB及び東北6県で出版・公表している淡水魚類を対象とした県版RDBである．なお，各県によりRDBカテゴリーが相違しているが，本報告ではRDB掲載種として一括して扱った．RDB掲載種の中で「地域個体群」としている種，テツギョ及びチョウセンブナについては除外した．スナヤツメ，メダカ，イトヨなど最近の研究により複数種として取り扱われている魚種については，その取り扱いが県により相違していることから，1種として扱った．

【結果及び考察】

東北6県の県版RDBに掲載されている魚種は12科39種である．このうち，環境省版RDBに掲載されている種は17種である．

県版RDB掲載種を後藤（1987）に従い生活型により区分すると，次のとおりとなる．純淡水魚のうち一次的淡水魚（海水中で生存できない）は，キンブナ，ヤリタナゴ，タナゴ，アカヒレタビラ，ゼニタナゴ，シナイモツゴ，ホトケドジョウ，ギバチ，アカザ，二次的淡水魚（海でも生存可能）はメダカ，陸封性淡水魚（本来は通し回遊魚であるが一生を淡水域で暮らす）はスナヤツメ，シベリアヤツメ，エゾウグイ，クニマス，イトヨ陸封型，トミヨ属淡水型，トミヨ属雄物型，カジカ大卵型，ハナカジカ，ジュズカケハゼの20種で全体の51%を占めた．通し回遊魚は，降河回遊魚がカマキリ，遡河回遊魚がカワヤツメ，マルタ，ウケクチウグイ，イトウ，シラウオ，クルマサヨリ，イトヨ降海型，シロウオ，両側回遊魚がカジカ小卵型，カジカ中卵型，カンキョウカジカ，ミミズハゼ，スミウキゴリ，エドハゼ，ビリンゴ，クロヨシノボリ，チチブ，ボウズハゼであった．

これらの魚種の中で，シナイモツゴはすべての県で掲載種となっていたほか，エゾウグイ，ヤリタナゴ，タナゴ，ゼニタナゴ，ホトケドジョウ，アカザ，トミヨ属淡水型，トミヨ属雄物型などは，その天然分布の認められる各県で掲載種となっていた．

県版RDB掲載種に対する脅威として，護岸や河床の改変，圃場整備，ため池や水路の改変，水量の減少，水質の悪化など物理的な環境の改変のほか，オオクチバスなど魚食性外来魚による捕食，近縁種との競合，交雑，遺伝的攪乱など生物的な環境の改変及び乱獲・密漁などが挙げられており，いずれも人為的なものである．

一方，RDB掲載種における希少性は，①分布域が最初から限定，②個体数が多かったが最近減少，③分布域が減少，に大別される．これを温暖化傾向という長期的なトレンドの中でとらえると，①に該当するエゾウグイ，トミヨ属淡水型，トミヨ属雄物型，ハナカジカは遺存固有種であり湧水に依存していることから，湧水量や水温の変化が大きな影響を与えることが懸念される．②及び③については，水温上昇によるオオクチバス，コクチバス，ブルーギルなど魚食性外来魚の分布域の拡大可能性（鈴木，2001）及び繁殖率の増大が懸念される．③については，通し回遊魚を主体に分布域のさらなる縮小あるいは拡大が予想される．RDB掲載種については，常にモニタリング調査を行い現状把握をする必要があるとともに，予防原則を基本とした対応が重要である．